

## ■第4回都市セミナー 議事録

---

●日 時 平成22年11月1日(月) 15:00～

●会 場 福岡市役所本庁舎15階 講堂

●参加発表者(敬称略) 2人

松田 美幸(学校法人麻生塾法人本部ディレクター)

山下 永子(財団法人福岡アジア都市研究所主任研究員)

●フォーラム記録

### 1. 開会挨拶

(松本法雄 国際知識経済都市会議実行委員、財団法人福岡アジア都市研究所副理事長)

2010年7月7日から9日にかけて、第3回国際地域ベンチマーク協議会、通称 IRBC (International Regions Benchmarking Consortium) の定例会議が福岡市で開催された。

IRBCはシアトル市の提案による、類似した規模や産業構造をもつ地域の協議会。互いに異なった取り組みや状況を比較し(これをベンチマーキングという)、成功事例を学び合い、各都市、地域の発展を目指していくことを目的にしている。会員は、バルセロナ、バンクーバー、ストックホルム、大田広域市、福岡市など、各集約産業に強みをもつ世界10都市で構成されている。

第3回会議のテーマはナレッジ・リージョンズであった。知識、技術、人材などのいわゆるナレッジを集積するための仕組みづくり等について、ダブリン、ミュンヘンを除く8都市、地域のリーダーが、それぞれの取り組みを具体的に発表し、その発表を元に多くの意見交換が行われた。知識集約型の福岡地域の形成に向けた多くの示唆を得ることができた。福岡ではこの会議を開催するため、福岡市をはじめとする行政、九州大学をはじめとする学識研究者、さらに企業の参加を得て、産学官の実行委員会を組織し、セミナーや勉強会など合計39回に及ぶ自由な意見交換会を行ったが、このプロセスの中で多くのネットワークの形成、知識体験を得ることができ、その成果が福岡地域の大きな財産になることの可能性を秘めていることを実感できた。その成果は9月1日に開催された地域フォーラムでこれからの福岡地域の知識経済の形成に向けた方向性として示し、その実現に向けた取り組み方策の提言を行った。その提言タイトルは「新しい挑戦を始めよう」であり、一人でも多くの方々がこのフォーラムで経験した行動指針を共有し、ともに行動を開始する願いを込めたものとなった。

本日は、国際知識経済都市会議を通じ、調査研究に携わってきた福岡アジア都市研究所の研究成果、および実行委員会主催の会議でいただいた多くの示唆を、参加した皆さまに報告し、その成果を今後具体化するための戦略について報告をさせていただく。報告を踏まえた会場の皆様との自由な意見交換の場も設けている。本日のセミナーにおいては、皆様方の活発な意見をお寄せいただくことをお願いし、また今後の福岡地域の知識経済都市づくりにつなげていく場づくりのきっかけとなれば幸いである。

## 2. 研究報告 (15:15~16:30)

研究報告内容の詳細、およびデータに関しては、「福岡地域における知識創造と知識経済に関する基礎調査」<http://www.urc.or.jp/jigyou/jutaken/documents/jyutaku22.1.pdf> をご参照ください。なお、本セミナー中の発言データをご利用される場合は、上記報告書の内容でご確認いただくか、本研究所までお尋ねください。

### 1) 国際知識経済都市会議の概要 (山下永子)

私の方からは国際知識経済都市会議について説明をさせていただきます。

IRBC の福岡会議は第 3 回目の会議だ。第 1 回シアトル会議、第 2 回バルセロナにも私は参加させていただいた。そこで得たことがある。知識はリラックスした会話や対話が弾むような空間から生まれる。また、新しい創造もそこから生まれる。そういう風に考えたときに、発表者である私たちがしかめっ面をして、かたい表情でデータを読む会場ではきっと皆さんもリラックスできないだろうと思った。そこで、あえて壇上にソファを運んで来て、そこからお話ししようと考えた。私たちもリラックスしてプレゼンテーションするので、どうぞ皆さんリラックスして私たちの報告を、会話をするような感じで聞いていただきたいと思います。

まず、国際知識ベンチマーク協議会 (IRBC) とは何かという話をしたい。IRBC は、2007 年にシアトル市が産官学で共同して発足した国際地域のコンソーシアムだ。10 地域が参加し福岡は日本で唯一のメンバーとなっている。

この 10 地域の人口規模は少ないところで 100 万人ちょっと、多くて 500 万人。基本的には都市圏が参加するネットワークとなっている。

2005 年の年間所得で見ると、福岡が左から 3 番目で、318 万。ほかの地域を見ても 200 万から 300 万、400 万とある程度所得が安定した所得が得られる地域が参加している。

国際化という視点で見ると、福岡は人口に占める外国生まれの人口の割合は 1.4%だが、50%を超えている地域がある。低いところで 8%なのだが、だいたい国際化が非常に進んでいる地域の中に福岡が含まれている。こういったバックグラウンドをもつ地域が参加している。

本コンソーシアムの目的について少し話したい。IRBC は国を越えて経済規模の類似性のある地域が集まって、地域の経営の成功事例を学び合い、比較し、それをこれからの地域の発展に活かしていこうという目的をもって設立された。これだけ地域間競争が激しくなって、具体的な人や物、お金の奪い合いがある時期に、具体的にどうしたら良いのかということを知りあう必要があるということ発想が背景にあった。第 1 回目はシアトルにおいて、「革新的な地域」というテーマで、第 2 回目はバルセロナで「創造性と人材」、今年の 7 月は福岡で「ナレッジ・リージョンズ」というテーマで開催された。

「ナレッジ・リージョンズ」とは聞き慣れない言葉と思うが、知識、技術、人材などのナレッジが集積する仕組み、魅力を持ち、集積が集積を呼ぶ好循環を実現した地域と言える。このことについての理解は結構難しいので、この「ナレッジ・リージョンズ」とは何かというのをご理解いただくための 2 時間ということでご理解いただきたいと思います。

さて、今回の福岡会議開催にあたって、私どもは産学官で実行委員会を結成した。これまでシアトル、バルセロナにも、産学官チームで参加してきたが、きちんとした実行委員組織を立ち上げ、ワーキンググループを作り、本会議を機会として今後の福岡県の発展に向けた行動につなげていこうという意味を共有し準備にあたった。調査研究チームは一つのワーキングチームとして発足したものである。

調査研究チームは、4月に実行委員会が設立されてすぐに結成されて動き出した。会議は7月に開催されたが、その事前準備施設として、HIRAKE-BA というスペースをイムズ内に設けた。調査研究チームは、10地域を学ぶセミナーを企画しそこで数回にわたって開催した。IRBCの会議は3日間だ。たった3日間で学びきることは難しい。そのための事前知識を勉強しておこう、共有しておこうという趣旨で、セミナーは開催された。また、その間、もっと情報を得るために、海外都市を訪問してインタビュー調査なども行った。さらに、7月の福岡会議では、調査研究チームメンバーが、モデレーター・司会進行を一部にないつつ、参加し会話をしながら知識を得て情報交換を積極的に行った。

本実行委員会は会議の終了をもって解散することはなかった。成果を活かすために、これまでフォーラムを開催したり、今日のような報告を行ったり、最終的には研究報告書を取りまとめて作るまで行う。

## 2) 調査研究報告（松田美幸・山下永子）

松田： 福岡が IRBC のメンバーになったことを含めて、「福岡はラッキーだ」と言われることがあるが、皆さんの中にそういう風を感じられている方はいらっしゃるだろうか。ナレッジ・リージョンズの共通項の1つは、優れた大学がたくさんある地域である。そのことを考えると、100年以上も前に九州大学が熊本ではなく、福岡に来たということがどんなに大きなことであったかと、私どもは本当に思い知らされる。地形など私たちの地域には、様々なラッキーなことがある。シアトルも貿易都市であり、マイクロソフト、アマゾン、スターバックスなど国際的なブランドの会社がたくさんある。よく彼らも自分たちは運が良いと言われていると言うが、運が良いだけではこのように元気で未来を考えられる地域にならない。

近年、福岡は運が良いとか、注目されていると感じるようになったことの一つに、イギリスの雑誌モノクルで、“2008年世界で住みやすい都市25”のランキングで17位に評価されたことがある。その時、自分たち自身がくすぐったいような、うれしいような思いをした。なんかの流れでこうなったと考えたが、翌年に16位、今年は14位に入った。気質が開放的、生活がとても心地が良いということが評価されてのランキング入りだった。評価の中には、芸術性に触れやすい環境が足りないとか、外国人が来るのに、会議をするのに格の高いホテルがないなどの指摘はあるが、ランキングと一緒に並んでいる都市は、皆さんも、かなりご存じな都市ばかりと思う。配布資料にモノクルの今年の上位の表がある。左の星マークがついているのが IRBC の会員地域。25都市の中に IRBC の会員地域が7つも入っている。入っていないのはシアトルとダブリンと大田だ。シアトルは元々の選定の中に入っていなかったのかもしれない。別にシアトルが低いというわけではない。

モノクルの順位をみて、福岡が、少なくとも比較対象の都市になっている。そして、その中でこういう順位がついているということ意識していただきたい。

配布資料には、他の指標も載せている。日本の森記念財団が2年前から行っている世界の総合都市ランキング上位35位、中国社会科学院の上位20都市のランキング。米国雑誌フォーリンポリシーによる65都市の国際度ランキングだ。このように中国や米国のランキングのように、経済力や世界の影響力でみる見る指標には、IRBC都市は上位に入っていないが、モノクルのように生活の良さなどが視点になってくるとランキ

ングに入ってくる。

福岡とダブリン以外の IRBC 都市はオリンピックや万博の開催を経験している。シアトルは 62 年にワールドフェアがあった。ボーイングの本拠地なので、当然これから宇宙航空時代が来るということで、宇宙時代の人類というテーマで開催された。そのときできたのが、あのスペースニードルだ。

IRBC の会員地域には世界トップクラスの大学がある。ナレッジ・リージョンズにとって、研究大学は必要条件で、福岡には世界に誇る九州大学がある。イギリス THE (Times Higher Education) の世界ランキング 200 位内に昨年も今年も、それぞれの地域から 1、2 つ入っている。大学のランキングについては色んな意見があるので、一つの物差しとして見てほしい。

福岡はただ単にラッキーなだけではなくて、ナレッジリージョンとして、これから世界の中で競争していく上で、力、素質を持っている地域だと言えると思う。他の地域も同じように、シアトルも 80 年ごろまではそれほど国際的な知名度はなかった。シアトルにボーイング社ができたのが 1916 年だ。第 2 次大戦中は戦闘機を作っていた。実際に従事していたのは女性だった。男性は戦争に行っていたからだ。以前、なぜシアトルでは女性がこんなにたくさん活躍しているのかと聞いてみたことがあるが、答えは戦後にさかのぼった。戦争が終わっても、地域の生産を支えた人たちが様々なところで活躍し、それが今のシアトルを支えたからだと言う。さてシアトルは、ボーイング社があるから万全かと言うと、そうではなくて、終戦とともに一気に需要がなくなって、7 万人が失業したり、あるいは 71 年にコンコルドで負けて、一気に 4 万人解雇したりなど様々な紆余曲折があった。そういったなかで、ビルゲイツがマイクロソフトをシアトルにつくった。また、港があり、シアトルにはコーヒー豆を焙煎する会社が集まっていたのだが、そこの一つがスターバックスとして世界的なブランドの会社になったりしてきた。もともと移住者たちやアイディアのある人がたくさんいた地域だったが、マイクロソフトができたことで IT の会社がたくさん集まりだした。最近ではイチローがマリナーズに行ったりして、日本でも色々と注目を集めている。一方で、ボーイング社はいつまでもシアトルにいるとは限らないという警告を何度も発してきている。実際、2001 年に本社機能がシカゴに移転した。ボーイングの従業員規模は 10 万人だが、ワシントン州の従業員は半分程度に減った。ボーイングがこれから先もずっとここで製造するという保証はない。したがって、地域の財界、行政、全ての方がいかにシアトルにボーイングを引き留めるかが、最大のテーマというところの意識を持っている。これからグローバルな競争が激しくなっていく中で、このように製造業の企業もどこに移っていくかわからない。まして、福岡のように大きな製造業のように労働力が必要でない、サービス業の会社がたくさんある地域では、今はインターネットの時代だから、どこに行ってもビジネスができる。本当に、福岡は、魅力があって、福岡にずっと居てくれるまちにしていけないと、これから先は厳しいということがシアトルの例を見てもわかる。

IRBC が生まれた背景について、先ほど趣旨説明でふれたが、色んな物語がもっとある。シアトルの港湾公社、米国の場合は日本と違って、独立した公社になっている。シアトルがこれから国際的に伸びていくためにも、国際的な港の経営の優秀な人を呼んでこようということになって、その CEO をオランダのロッテルダムからヘッドハン

ティングしてきた。トップをヨーロッパから呼んできた。シアトルに来た CEO は、港湾と市役所と商工会議所と地元の会社が全然コミュニケーションしていないことをすぐに指摘した。こんなにばらばらで国際的なマーケティングが出来るわけがないということを書いてくれたのだと言う。ヨーロッパのトップクラスの港湾関係者からの指摘を受けて、地元の産官学のリーダーがチームを作り、92年にロッテルダムにスタディミッションに行った。シアトルは、それまでもアメリカの中のいくつかの都市を毎年順番に研究に行くというスタディミッションを長年やっていたのだが、それを国際的にやってみた。たぶん、市長クラス、学長クラス、役員クラスが一緒になって大がかりに海外に視察に行くのは、これで最初で最後だろうと彼らは思っていたそうだが、なんとなんて行ってみたら、いかにいろんなことが学べるかということに気付いた。同時に産官学のトップの人たちが1週間一緒に旅行をして暮らしていくと、その中で人間関係がもっと深まるし、シアトルの課題が何かということ、その場で一緒に考え、帰ってからの意思決定がすごく速いと言う事を経験した。そこで、これをきっかけにインターナショナル・スタディミッションを毎年やろうということになった。その事務局をしているのが、IRBC の発足のきっかけとなったシアトル貿易開発協議会 (TDA) だ。その後、シアトル貿易開発協議会は、貿易推進の要となる組織として、他の地域がどんなことをしているか知らないといけないということを考え、IRBC につながった。

写真のビル・スタフォード氏が、シアトル貿易開発協議会の事務総長だが、来年20年目を迎える協議会創立当初からの事務総長だ。シアトルの職員を経験し、その中でもインターガバメンタルリレーションとあって、州政府、連邦政府との連携をとったり、横で他の市長と連携をとったりというところの部長をされたり、副市長も何回も経験されてきた方だ。例えば、福岡で、これから皆で貿易を推進するトップを作ろうと考えた場合、皆さんだったらどういう方をトップに選ばれるだろうか。貿易の経験が豊かな人を選ぼうとなると思う。シアトルはなぜ彼を選んだのか。貿易のことは素人でも良いから、それよりも、貿易など国際的なマーケティングに関わるには、シアトルのことも、シアトルの中の人間関係も知らないといけない。そういうことから、ビル氏が選ばれてこの職についたのだ。ビル氏たちが、毎年スタディミッションで訪れてきた都市を見ると、90年代は確かに港、それも大きな港を持っているところが多かった。2001年にストックホルムに行って、その後、バルセロナに行き、このシアトルチームはとても大きな衝撃を受けたそうだ。大きな地域開発、綿密な戦略をもって、地域の産官学の皆さんが連携しながら進めて行く姿に非常にショックを受けたと言う。地域の経済戦略によってバルセロナは甦ったからことを知ったからだ。それから上海に行って、中国の伸びの凄まじさにまたショックを受けた。実はシアトルは、2005年に地域の経済戦略を作るまで、広域で自分たちの経済戦略を持っていなかった。まさしく、運が良いままに来ていた。このあたりから、シアトルの産官学のリーダーたちはこのままじゃ大変だ、国際競争力をつけないと気づき、シアトルはのんびりしてられないという意識を持ちながら、毎年スタディミッションに行き始めたわけだ。結果的に IRBC のメンバーになったのは、シアトルがここから学ぼうと思って行ったところ、その中でもさらに選ばれたところがメンバーになった。全米都市連盟の人がシアトルのスタディツアーは米国で最高のスタディツアーだと言った。ビル氏は、スタディツアーの意味を次のように述べている。リーダー間で1週間同じ釜の飯を食いな

がら、関係を構築していく。シアトルが抱えている問題を他の都市から学べる。成功事例からだけでなく、失敗からも学べる。リーダーたちはスタディミッションに行く前に、事前に2、3回何を学ぶか徹底的に調査をし、それを踏まえてプログラムを組む。当然、行ったらシアトルの宣伝をするし、場合によってはそのテーマにそって小さな会議を開いたりする。何よりも大事なものは、忙しいリーダーたちは、世界のことは分かっているような気がしているが、実際に行ってみると全然違うということが分かることだ。リーダー達の国際感覚を磨くという意味もある。

この資料は、3年前の「福岡へのスタディミッションに参加しませんか、福岡、北九州に来ませんか」という案内だ。福岡はロボットや物流やもっといろんなことがあって、ハートのある地域ですよと宣伝してもらった。3年前のことだが、つい最近、シアトルの会議で、福岡に来られた方に「3年後の今、何が記憶に残っているか」と聞く機会があったが、ほとんどの方がエコタウンと回答した。皆、北九州も福岡だと思っている。福岡と北九州市を一緒に見てもらったのだが、福岡がとても感じの良いまちで、住みやすいまちだと印象に残ったようだが、記憶に残ったのはエコタウンだった。

さて、そもそもベンチマークとは何か。地域間だけがベンチマークしているのではなくて、企業も経営手法として常にベンチマークしている。プロセスや結果を指標化、数値化して、良い所と悪い所がすぐ分かるようにと行うもの。良い所はなぜあんなにうまくいっているのかと分析することによって、成功要因を見つける経営手法だ。ベンチマークには、比較して終わってしまう、数字を見て満足してしまうということが往々にして起こりがちなので、そうではなく、違いを見つけ、それを元に分析することが重要だ。そのためにもトップクラスと比較しないと良い所が見つからない。ちょっとだけ真似しても全体的な成功に結び付かない。そのために、適切な指標を見つけ出すことと、適切な比較相手を見つけることが大切である。企業は必ずしも同業と比較する必要はない。よく例に挙げられるのが、飛行機会社が、飛行機が空港に着いてからひっくり返って、戻っていく、そのターンオーバーをいかに速くするかという課題のときに、比較するのは、カーレーサーのコックピットのチームだ。自分たちが目指していることに対して、戦略的に一番重要なことを達成する上で学べる所が同じだからだ。シアトル、バンクーバー、ヘルシンキという IRBC メンバーたちはこの IRBC に入る前から、ずっと自分たちと他の都市を比較しながら改善してきている。シアトルの場合は米国の他の大都市を常に意識しているし、バンクーバーもカナダの都市だけでなく、米国の優秀な都市を意識している。

ヘルシンキは、なかでもベンチマークのバラエティに富んでいる。山下さん、なんでヘルシンキは色んな所と比較しているのか説明いただけますか。

山下： ヘルシンキはご承知の通り、ヨーロッパの一番はずれで、EUが統合したときにすごく危機感を持った。ヨーロッパの他都市をベンチマークする中で、ヨーロッパのはずれというポジションだけでなく、アジアに一番近い都市のポジションがあることに気づいた。そういうことから、バルト海地域、ヨーロッパ、モスクワ、北京もきちんとベンチマークしていくことが大切だと思うようになった。そう背景があって色んなベンチマークしていると聞いた。

松田： さて、バンクーバーの一人あたりの所得を見ると、米国やカナダで比べるとバンクー

バーは低い、心地よく感じてしまう。カルガリーを除けば、自分たちはそこそこだ思っていた。ところが、自分たちが国際都市として目指していく都市と比べると、ダントツに低いということがわかってきた。そこで、今、経済振興に取り組み始め、いかに住民の所得を上げるかといことを重要な課題にしてきている。

福岡はどうだろうか。配布資料に福岡市の2003年の新・基本計画やその時の国際化推進計画の一部をご紹介させていただいた。福岡市でも目標をきちんと指標化して、それを定期的にチェックアップして、改善に結びつけるという取り組みがされている。ただ、課題は、国際化推進計画の成果指標の目標設定の考え方を見てわかるように、過去の伸び率を下回らないとか、概ね10%増を目指すとか、あまり意図が感じられない。おそらく、今後、国際化推進計画を改訂し、新たな目標計画の設定をするときには、国際的なベンチマークを意識しながら、どこを目指すのかを明確にすることができれば、当然、それに沿った目標値の考え方、根拠の考え方が出てくると思う。そういったことを、私たちも一緒に考えていきたいと思う。

福岡が色んな所でベンチマークするとなると、政令指定都市間比較を行うだろう。もちろん、これから見えてくるところもあるし、当然ベースの状況が海外と比べると似ているところがあるので、これで比較することで参考になることも多々あると思うが、政令指定都市の人口の推移を見ると、大都市一極集中が進み、東京周辺以外の政令指定都市は横ばいか、まもなく下り坂にいくだろうということがわかる。福岡市はしばらく人口が増えているので、これだけ見るとちょっと安心してしまう。しかし、去年のバルセロナ会議で報告された数字によれば、2005年と2006年の間の人口増減率は、福岡は10都市中、一番下で0.1%だった。ヘルシンキは今北欧の中でも成長していて、この年寄り今はずっと増えているだろうと予測されるが、この時点で、他の8都市の平均伸び率は3%と、まだまだ増えている。人口増減に占める社会増減が大きいからだ。もちろん移民政策をとっていない日本では、同じようにはいかないが、それにしても世界には人口が減っている地域はいっぱいあるし、ヨーロッパでも減っている地域はあるが、このIRBCの地域は人口を増やしている。どうして増やしているのかということは、福岡の参考になるのではないかな。

モノクルのランキングは住みやすさや環境に重点を置いている。他の指標はまた違う。財団法人森記念財団都市戦略研究所が出した今年の「世界の都市総合力ランキング」には35都市が掲載されている。実は、2年前は30都市でスタートした指標だ。その時、福岡は入っていなかった。その後、東京だけ見ても、東京の強み弱みが見えてこないという理由から、去年から大阪、福岡が入った。なぜ、福岡が入ったかというところ、おそらく横浜を入れてもあまり東京との差が見えてこないからだと思う。そう意味でも、福岡は地勢的なユニークさなど他の政令指定都市にない魅力があって選ばれたのだと思う。この指標を見ていてわかるのは、住みやすさは良いのだが、購買活動や経済力の面で下位になっている。研究開発は頑張っている。環境もいい。これらに関しては、日本は他の国に比べてどこもいい。このようなことが比較で分かってくる。モノクルには入っただけで喜んでいたら、悪い面を指摘しているのが特徴だ。

もう一つ参考になるものに、アクター別の指標がある。同じ指標を経営者、研究者、アーティスト、観光客、生活者の人が重要だと思う指標を組み合わせ、ウェイトバックをしてランキングした指標が、アクター別でありランキングだ。福岡はモノクルの

ランキングが示しているように、生活者、住んでいる私たちから見ると凄くランクが上がる。良い所だ。ところが、外から来る方、観光客やビジネスをしようとする経営者にとっては35都市ではうんと下の方になる。そうやって捉えていくと、強みとこれから何をしないといけないかという課題が見えてきて、そこに私たちはフォーカスしていくと良いのではないかと考える。

さらに、もう一つ、この森財団のデータでユニークなのが、35都市をいろんな指標ごとに線で繋げて、相互関係を見ているところだ。例えば福岡は東京と太い線でつながっている。後はほとんどない。他の地域はたくさん太い線、細い線がつながっている。福岡は、確かに国際空港もあるし、便数も増えたが、全体的に見ると、まだ東京としか繋がっていない。企業の本社、支社とどのように繋がっているかを見ると、福岡はぽつんと外れている。したがって、ポテンシャルは凄くあるのだけれど、まだまだ世界と繋がっていないと言うことが見えてくる指標だ。

さて続いて、比較しながら学び合っている IRBC のメンバーが福岡でどんなことを学んだのかということ、山下さんに紹介してもらおう。

山下： 福岡会議のおさらいをさせていただく。今回の会議は産官学、中間組織（インターミディア）という4つのカテゴリでセッションをもった。会場はアクロス、九州大学、能楽堂をメイン会場として、それぞれの都市が自分たちの地域の戦略について発表があった。私たちは対話の会議にしようと考えた。そこで、その議論や対話のプロセスを、各会場横壁にセットした模造紙にグラフィックで可視化し、同時に共有しながら、カフェっぽい雰囲気で見聞きしながら進めた。この国際知識経済福岡会議の運営は、日本ファシリテーション協会という会議を促進する団体の方の協力を得て、実験的に取り組んだ。それも一つナレッジリージョンとしては必要な要素だと思っている。

ナレッジ・リージョンズは、実行委員会が立ち上がったときに、実行委員の方々に説明するのがすごく大変だった。「難しすぎる、なんだ、ナレッジ・リージョンズとは、ナレッジ・エコノミーとはなんだ」と言われて、一生懸命説明をしようとしても、なかなか理解が促進できなかった。他の地域に「このテーマでやります」と連絡するとき、新しい言葉だから理解が難しいだろうと思っていたら、実は欧米では普通に普及していた。EUでは、随分前からナレッジ・ハブ都市を認定していた。つまり、ナレッジ・リージョンズという地域をEUが選定し、そういうところに必要な施策、お金を出していく。プロジェクトを一緒に進めていくということが随分前から行われていたのだ。このナレッジ・ハブに、ヨーロッパの IRBC 会員は全て選ばれている。このヨーロッパの地域は、「私たちはナレッジ・リージョンズである」という意識をもって、福岡の会議に参加されたというわけである。

研究大学とナレッジ・リージョンズについて、松田さんが若干触れられたが、今回の福岡会議において、マイク・ルイス氏が、ナレッジ・リージョンズと研究大学についての調査研究報告をされた。マイクさんによると、産官学の連携で、通常、私たちがイメージするのは技術移転であり、研究大学と言うと高度な技術があつて、それを産業界に移転する、特許を取って製品化することを思い浮かべがちだが、それだけでなく様々な形の産官学があるとのことだ。また、産官学連携を促進していくには、それを結ぶコアな存在が必要であるとマイクさんは指摘し、コアと言うのは、「Wake-Up in the morning Test（朝、起きたときにそのことを真っ先に考えるような人）」がコ

アにいるべきで、それを増やしていくことがナレッジリージョンには必要だと述べた。技術移転による産官学連携は凄くイメージしやすいが、今回の会議で強く学んだのは、人による、人の移動による知識移転が重要だということだった。海外から参加した方、行政の関係者、大学の関係者、企業の方、皆別のセクターで働いたことがある人ばかりだった。人がポジションを変えながら伝道師となって、知識を増していく。そういうことが必要でないかということ、実感し理解した。

メルボルンの参加者からは、OECD 評価プログラム「高等教育機関が地域の発展にもたらす寄与のためのプログラム」が報告された。OECD は先進国が加盟する経済支援の組織だが、地域と高等教育を結び付けて、それを地域に還元していくプログラムに、世界中で取り組んでいる。2005 年から始まり、今 24 の地域が参加しているが、残念ながら日本の地域はどこも入っていない。OECD から日本の地域へのオファーは行っているとのことだが、受け手がないと言う現状だそう。メルボルンは OECD のプロジェクトを、さらに独自の地域プロジェクトとして進めようと積極的に活動している。それは、パスカルのピュアプロジェクトという名称だが、そういうことがあっているということに今回は触れるに留めたい。

このメルボルンの大学高等教育は、凄く福岡にとっての参考になると思った。メルボルンの前にオーストラリアという国がどういう風に高等教育を考えているかということ若干説明すると、高等教育機関を主要産業に位置づけている。留学生を獲得することは輸出産業である。地域が大学と連携するということを考えようというときに、大学とは学生に教えるところ、難しいことを研究するところではなく、主要産業であり輸出産業だと捉えているところから違う。そこに衝撃を受けた。

メルボルンは市内にキャンパスを持つ大学が 8 つある。学生数は 26 万人だ。雇用者数が 2 万 2 千人以上いるし、その歳入は 3200 億円以上だ。留学生による輸出額は 1600 億円以上、これだけ見ても凄くお金を生み出す力が大学自身にあることが理解できると思う。そういったことが背景にあり、メルボルンは、様々な高等教育に関する産業育成支援を行ってきている。その一つの成果としては雇用の伸びがある。メルボルンでは、この 2 年間に教育目的での施設を利用する雇用は 17% 増えている。例えば、教育関係の起業はこの 2 年で 43% 以上増えた。こういった高等教育が産業であると踏まえた上で支援をすることが、自治体と企業である。その結果、雇用を増やすことにつながるということ、メルボルンのプレゼンテーションの中から学ぶことができた。

さて、メルボルンの大学は質が良くないと、「うちは大学のまちなので、大学を支援している」ということにはならないと思うが、メルボルンには非常にランクの高い大学が揃っている。一つ面白いことがある。メルボルンにある RMIT 大学は、独自にグローバルユニバーシティ、シティインデックス（大学都市としての指標）をビクトリア州政府と一緒に開発し、ランキングを公表し、しっかりとメルボルンを 4 位に格付けしている。ちなみに東京は 3 位だ。「大学のまちで行くんだ」というと決めたら、大学のまちとしてのポテンシャルを可視化し「大学のまち」としての正当性を、ランキングに示して内外にアピールする。ユニークかつ非常にマーケティングに冴えた都市。メルボルンには、そういう印象を強く持った。

もう 1 つ、ユニークな施策に、オーストラリアのナレッジ・キャピタルを目指す施策がある。これを目的としたセクションを新たに作った。知識首都室（OKC）である。

市役所と産官学連携の委員会と8大学が共同で出資し、現在5名の専門のスタッフが民間から引き抜かれ働いている。トップは市の職員だが、専門のオフィスを作り、オーストラリアのナレッジ・キャピタルとしてのメルボルンの発展、プロモーションへの協力、協働を行うなど、様々な活動をやっている。じっとしているだけでは大学との連携は進まない。色んなやり方があると思うが、メルボルンの場合は特に行政が大学の必要性、可能性に気付き、イニシアティブをとって、大学の学長たちに市長自ら声を掛け、「大学がメルボルンに果たしている役割がこんなに大きいから、もっとアイデアを出してほしい」と伝え、大学にリサーチをして低減してもらった。その提言と協働のリポートに示されたのが、このOKC設置だった。一つのセクションを作るプロセスに産学官による連携があったということも、非常に面白いし、参考にすべき点だと思っている。

OKCでは、留学生に話を聞くような場を設けるなど様々なプロジェクトに取り組んできている。例えば、空港における留学生のウェルカムディスクの設置はとても良い参考事例と思う。2月になると空港に留学生ウェルカムブースが設置される。色んな世界からドキドキしながらたどり着いた留学生に、空港で「これさえあれば1週間メルボルンを楽しんで生活できますよ」というセットを配っている。すぐに「留学生ウェルカム」な雰囲気を感じてもらえるし、「来てよかった、不安はなくなった」と留学生は思うようになる。「こういう所に行けば自分の国のものが食べられる、こういう所にこんな住まいがあるんだ」という情報も得られるので安心だ。また、他には国際的な他地域との共同調査や、パスカル等世界的なネットワークの調査に参加する窓口になっており、国際的なパートナーシップの形成にも取り組んでいる。実は私、2週間後にメルボルンに行かせてもらう。メルボルンがホストするナレッジシティズ・ワールドサミットというナレッジシティといわれる都市が集まる会議に参加するためだ。この会議はこれまで2回開かれていていると言うが、世界中から約400名の参加が見込まれている。メルボルンは会議を主催し、世界に向けて存在感を示すことによって、ナレッジシティ・アワードというランキングを現在の20位から1位にしたいと考えている。市議会への予算請求の紙にそう書いてあった。「だから、お金ちょうだい」。こういったサミットをホストして運営するセクションとしてもOKCは存在している。

バルセロナについても学んだ都市事例として紹介したい。バルセロナはナレッジ・クラスター戦略を、非常にお金をかけ、人的パワーをかけて取り組んだ。知識産業を計画的に集積し、そこで起業家を支援することを行った。バルセロナという地域は、フランコ独裁政権がスペインを支配していたとうこともあって、70年代80年代は非常に経済が停滞していた。スペインの首都はマドリッドだが、バルセロナは置き去りにされていた。発展の契機をつかんだのがバルセロナオリンピックだ。92年のバルセロナオリンピックのために、産業構造、インフラ構造全部変えていこうと、国がかりで色んなことをし、かなりの成果をあげた。同時にバルセロナは、国が推し進めるもの以外に、カタロニア自治州と広域地域で独自の政策、経済戦略をとっていこうという政策を進めた。その1つがクラスター戦略だ。私たちは、バルセロナは素敵なまちは素敵だというイメージを持っているが、スペイン自体は、ヨーロッパで言うと、ドイツをトップとしたら2周遅れぐらいのグループに属している。ヨーロッパの大学の連携グループが比較した指標によれば、例えばトップクラスのアムステルダムは一人

当たりの GDP は 49.8 千ユーロだが、バルセロナはその半分くらいしかない。アムステルダムは GDP の半分くらいの生産性しかない。そういうレベルの所なのだ。世間から華やかに見えるが、自分たちの生産性が劣っているということをきちんと自覚した上で、何かやらねばならぬとバルセロナは考えた。そういう背景にもとづき経済戦略を展開していった。

バルセロナは、二つのアプローチで進めた。一つは、経済的なアプローチ。地域にバリューチェーンを確実に構築していくやり方だ。@22 バルセロナという広大な敷地に、産業クラスターを形成した。もう一つは知的なアプローチだ。起業家育成を行っていきこうとバルセロナ・アクティバという施設を作り、そこでアントレプレナーシップ（起業家精神）とエンプロイアビリティ（雇用されうる能力）、つまり、人材への支援をソフト的に提供するというを同時に進めていった。@22 バルセロナは都市部にあるかつての工業地区の開発・再生プロジェクトだが、ビジネス・産業用の総床面積は 320ha。ちなみにアイランドシティは全部で 401ha、九大伊都キャンパスが 275ha である。320ha の地域にメディア、ICT、エネルギー、医療技術、デザインの 5 つのクラスターを形成し、同時に住宅も整備し（80ha）、色んな研究機関を作り、新しい産業、経済を作っていくと取り組んでいる。5 つのクラスターをバリューチェーンとして活性化していくこの施策は、バルセロナモデルと言われている。ハードの整備は今だと日本では時代遅れだが、ハードとソフトを計画的に一緒にやると、これだけ凄いものになるということを実感した。

バルセロナがプレゼンテーションした資料をお見せしている。「DO IT now!」、ターゲットグループを設定し、バルセロナの今後の地域の発展につながるような人を世界中から集め、定着してもらおうプロジェクトだ。インキュベーション・オフィスを作り、ワンストップサービスを提供し「ここバルセロナでやってみましょう」というキャンペーンだ。これも非常に面白い事例だと思う。

IRBC で学んだこととして二地域の事例を紹介した。次に、バルセロナやメルボルンの視点で福岡を眺め直したときに、どういう風に見えるのかについて、話したい。

福岡のこれまでの取り組みと現状の課題として整理している。IRBC が市長自らプレゼンテーションされた内容だ。福岡がナレッジリージョンを担っていくためには大学、アジア、まちづくりの 3 つのキーワードが必要だと述べている。人口が減少する社会であり、いずれは優秀な人材の減少につながっていくことを背景として、若者が減っていく中、人材を増やして、それぞれの人材の質的な向上を追い求めて行くということが必要であり、福岡の場合、そのキーワードとして大学、アジア、まちづくりに着目すべきであると福岡市長は認識している

ではさて、大学、アジア、まちづくりのどういう所が課題で、どういうことをこれから進めていったらいいのか。まず大学だ。先ほどメルボルンの事例で、高等教育が産業として認識されていると話したが、日本では大学、高等教育が産業として認識されていない。少子化で若者、人口が減っている中で、学生を獲得するということが地域の課題として認識されていない。少子化で大学の生徒が減るのは当たり前と思っているのは、全国での 18 歳人口が減っているわけだから当然なのだが、大学の都市と言われている京都では、この 5 年間で 373 人増えている。福岡市では 5,000 人減っている。これが地域の課題と捉えているかどうかの分かれ目だろう。大学生が減る＝奪い

合いが地域でおこっている。

もう一つの課題は、大学の研究や教育と地域の発展の結びつきが十分でないことだ。大学発ベンチャーは増えているが、技術の移転というイメージがイメージとして定着しているからなのか、その他の産学連携、特に人の流動性がもたらす産学連携がちょっと弱い。福岡市は大学のまちで大学生、大学院生を合わせて7万人以上いるが、専門学校を含めると日本の大都市の中でも極めてポテンシャルが高いところだ。

知識集約産業、つまり成長産業の構造の中で、高等教育を産業ときちんと見立てて整理したら、どういうポジションにあるかというグラフである。グラフの横軸は、大都市15都市の中での特化係数、つまり福岡のオリジナリティを示し、縦軸は雇用成長をあらわしている。産業分野別に従業者がどれだけ増えているかを示すグラフだ。上に行くほど成長性が高く、雇用が増えている分野で、右に行くほど福岡ならではの産業であるということ。マッピングして見ると、高等教育という分野は成長していて、他の都市に比べてクラスターが形成されている。高等教育を産業と名付ければ、重要な産業になると思う。

次に示すのは福岡市経済振興局が2005年に行った調査結果で、福岡市における大学の経済波及効果計算である。メルボルンの大学の波及効果は3200億円という話をしたが、福岡市内の21大学の需要増加額は2327億円。専門学校は市内に104校ある。この大学の数字を援用して、専門学校にアンケートをするなどして、同様の計算を試みた。その結果、あくまでも参考額だが、専門学校だけで1111億円の需要増加増となった。したがって、高等教育産業は約3438億円の経済波及効果（需要増加増）を福岡市にもたらしていると言える。これだけの経済波及を生んでいる存在である。一方で、福岡市の高等教育機関で学んでいる学生の数は10年間で1万人減った。単純に計算すると、この10年間に約344億円の経済は級の損失の可能性がある。学生が減っている現実を見ても、福岡市は高等教育支援をするべきだということが理解いただけると思う。

先ほど、ナレッジ・リージョンズになるには研究大学だけでは十分でないという話をしたが、研究大学は凄いお金を生む存在であるという一例を示す。最近、九州大学でカーボンニュートラル・エネルギー研究拠点構想がスタートした。このプログラムがスタートしたこと、つまり文科省に認められたことによって、200人以上のスタッフが雇用された。しかも3割以上の方が外国から来られた。こういった主要な研究拠点に選ばれる地域は、国際性が高まるし、お金がついてくる。世界トップレベル研究拠点プログラムというのも、九大で始まっているが、ここでも1拠点あたり、年間14億円の研究費が下りてきている。地域に大学があって、その大学と協働し、支援をしていくことが、学生の数の確保と、研究拠点としてのポテンシャルを上げて行くためにも必要でないかと思う。

福岡は、大学のまちと言っている。「福岡の大学に行こう」というパンフレットもある。これを出したのは、「大学ネットワークふくおか」で、福岡市が大学と連携して、事業を進めようという組織である。つい最近立ち上がった。まさにこれからということだが、京都はまさに大学のまちだが、福岡は専門学校も凄く多いし、特にサービスを教える学校が多いので、「大学ネットワークふくおか」はスタートしたばかりだが、専門学校も含めた上で、高等教育のまちとして売っていったらいいと思っ

ている。実際、専門学校にアンケートしたところ、専門学校も県外の大学や海外や自治体との連携を望んでいるということが明らかになっている。

さらなる産学官連携を進めてほしい。インターンシップのような事業をもっと進めることが大学と地域の関係を促進させると思うが、福岡都市圏の主要大学の数字を他都市圏との比較で見たと、福岡は、凄くインターンシップに行く学生が少ない地域だ。ちなみに東洋経済社の一般雑誌のデータから拾ってきて計算したデータである。インターンシップの促進なども今後推進していく重要なテーマでないかと思っている。

福岡の課題の1つにアジアという視点がある。アジアに焦点を当てた政策を福岡はずっとやってきているが、一方で全国レベルに通用するようなアジア経済政策の専門機関がなかなか定着しないなど不十分な面もある。アジアを冠につけた色んな会議をしたり、色んな施設を作ったりしているが、なかなか長続きしない。これも産学官連携などで、担っていく必要があると思っている。福岡市の取り組み一覧である。この資産がなかなか定着しない、活用できていない。ただ、確実な成果もある。九大とアジア文化賞受賞者で、ノーベル賞も受賞したユヌスさんとのプロジェクトが福岡で始まった。色んな事例が出てきているので、こういった連携をさらに進めていけたら良いと思う。

アジアに関しては、これまで交流の推進をやってきたが、交流の先にビジネスや観光、経済圏、生活圏のレベルまで進めていく事が必要だと思っている。今回、福岡の会議で、福岡に事務所を置く外資系企業の外国人スタッフの方が次のように言われた。

「福岡は住みやすいけれども、ビジネスの支援が外資系に対してあまり十分でない。私たちのような中小企業はサポートが受けられる所だったら自由に動ける敏捷性を備えている」。これはかなりの警告だと言える。この言葉のように、ビジネスしやすいまちにしていくことが必要ではないかと思う。色んなことをやっている事を広めて、もっとアピールしていくことが大事だ。

まちづくりに関する課題は、厳しい言葉で言えば、土地造成、売却、テナント誘致、だけに終わらせずに、バルセロナのようにハードを作っていくながら、ソフトの事業を同時にやっていく、人材に焦点を当てた施策、プログラムを長期に渡ってやっていくことではないだろうか。それが、産業クラスターのバリューチェーンにつながっていく。百道にはシステム LSI のセンターがあるが、ここは福岡県と北九州市、飯塚市などと九大が連携して半導体 LSI クラスターの拠点として大きな成果を上げている。こういった良い事例が福岡にはあるので、こういった事例をもう一度検証しながら、今後のまちづくりを考えていくべきではないだろうか。

松田さんにマイクをお返しし、地域戦略策定の事例について報告していただく。

松田：これから福岡はどうやって国際競争に勝てるような地域の戦略を作っていくべきなのだろうか。広域的に作っていかないと、今までのように市だけでやっても、経済の振興は上手くいかないの、国際的に戦うためには広域の戦略作りが必要だ。では、どんなことを意識しながら広域戦略を作っていけば良いのか。いくつかケーススタディがあるが、私からはシアトルの例を紹介したい。

シアトル市自体は人口約 60 万人。シアトル広域圏であるピュージェットサウンド地域でみると、4つの郡からなる約 352 万人の地域である。2000 年から 2040 年までに 40 年間で人口が 1.5 倍に増え、雇用も 110 万人に増えるという予測をする地域だ。

シアトル広域圏は、2005年まで経済戦略を持っていなかった。バルセロナに行ったり、上海に行ったり、色々見て、やはり地域の戦略が必要だということで、初めて広域で経済戦略作りに取り組んだ。ピュージェットサウンド地域協議会（PSRC）という従来、成長管理計画と長期交通整備計画の策定と遂行を担う機関に事務局をおき、成長管理をする部署、交通計画を作る部署、等既存の部署の横に繋がるところに、データをたくさん集めて分析する部署を作り、人員を増やして取り組んだ。この取り組みについては、手元の資料（報告書）にかなり詳しいので参照いただきたい。

この地域では、広域商工会議所が毎年、2泊3日の地域リーダーシップ合宿を行い、地域の産官学のリーダー、市長、知事、議員、大学の学長、企業の経営者が集まる機会を設けていた。今年も250人集まって、地域のテーマを徹底的に話し合った。このスキームのなかで、2002年に地域のビジョンと戦略づくりについての検討が始まった。その時の議長が4つのグループの中の一人で、スノホミッシュ郡のカウンシルエグゼクティブのボブ・デュエル氏だ。地域戦略づくりにはもう1年必要だということになり、2003年にも取り組んだ。そして、ボブ氏の議長任期が2003年までだったこともあり、2004年にPSRCの事務局長に抜擢された。彼が2年間に発揮したリーダーシップや色んな人を束ねていくという力が買われたのだ。そして、彼はスタッフを増やし、経済戦略づくりに取り組み始め、その過程でProsperity Partnershipという産官学の戦略づくりと一緒にやっていく組織を立ち上げた。最初は150の企業、NPO、自治体組織だったが、今は300の組織が集まる協同体となっている。資料（報告書）に地域リーダーシップ合宿の歴史を詳しく載せているが、見ていただくポイントは議長だ。2000年からの掲載だが、それぞれ様々な立場の方が地域をまとめる会議の議長を経験し、それにリーダーがついていく形になっている。かなり女性も活躍している。例えば、当時、まだどこかの会社で働いていた人が今は知事になっている。リーダーが出会える場があるということだ。そういう地域でできた戦略を資料（報告書）に載せている。戦略には、大きな二つのパートがある。クラスターを選んで、アクションプランを作るパートと、もっと国際性を高めていくためにも新しい産業を育てていく上でも必要な経済基盤づくりのパートだ。これを6分野に分けて戦略プランにしていた。これは広域で4つの郡にまたがる戦略で、各郡のそれぞれの経済振興策に反映されている。つい先日の会議でキングカウンティの市長に話を伺ったが「重複した戦略を作る余裕はない。広域で作ったものを自分たちの市に落とししていかないと、とても間に合わないし、そういう形でお互いにパートナーを組んでいきたい。」と明確に言われていたことが印象的だった。

経済成長戦略を共有した時のイメージを絵にしたものをお見せする。1枚の絵になるぐらいシンプルであることも大事だ。背景には、様々なクラスターの分析がある。バリューチェーン分析もある。北部九州は自動車の製造がここ10年ぐらい伸びてきたが、特別必要な人材像があまり明確になっていない、ただ工場ですべての自動車を作るだけの人でなくて、新しい技術の開発者、新しい技術を開発したときに使って設計する人など様々なバリューチェーンに沿った人材が必要になってくる。新しい技術者は大学院で担当し、自動車のデザインは専門学校で見直す。市場構造を分析することで必要な施策や人材育成のプランも明確に見えてくる。そのクラスターが得意の企業はどこに位置しているのかとかいうのも分析する。そうすると、何をすべきかというクラスタ

一別の戦略が見えてくる。

広域圏での主要政策と、その下のシアトル都市圏、その下のシアトル市は少しずつずれている。どこがずれていて、シアトル市独自を一覧にして、具体的アクションをすることが大切だ。私たちが広域の経済戦略を作る上で、このように地域のリーダーの存在は重要だと思う。クラスターのデータを手元に持つこと、蓄積したデータを使いながら、進めていく優秀なスタッフの専門的人材の存在も重要だ。そして、策定したら、色んな会議をしたり、合宿をしたりして、皆に伝えていくことも大切だ。紙に書いてきただけのものは絶対に実行できないので、実行プランに力を入れる。Prosperity Partnershipの経済成長戦略のアクションプランの一部を見てほしい。例えば、航空産業だったら、どんな事が必要かということが書いてあり、その後にCHAMPIONと書いてある。この責任者は誰かという個人名が入っている。実際にリードする組織はどこか。いつまでにやるのか。これを出して、毎年少しずつ回しながら計画を作っている。今年が5年の最終年になる。来年度の更新に向けて、12月から新しい計画づくりが始まっている。来年には次の次期長期計画を作られるということなので、私たちが彼らの例を学びながら、福岡の今後に活かしたら良いなと思っている。

最後に、韓国の広域戦略作りの例を簡単に紹介しておきたい。韓国はご存じのように、国が主導してぱっと決めてどんと進めている。去年の5月に政府がこれからは国際競争、地域広域で経済発展をさせる時代だといって、国を超広域開発圏、広域経済圏、基礎生活圏と3層に分けた。詳細は資料（報告書）を参照してほしい。一つだけ東南圏について触れておきたい。東南圏は福岡との連携を視野に入れている。広域経済圏が国境を越えて、経済交流をする動きは世界共通だ。米国でもカナダとの国境のシアトルがあるワシントン州と、カナダのブリティッシュコロンビア州がつい最近協定を結んで、移動や交易に関してもっとスムーズにするための取組みを開始した。

福岡においては、国境を越えた広域を考え、一つになって力をつけていくことも重要ではないかと思う。

### 3. フロア意見交換の要旨（16:30~16:55）

松田： 皆さんからの忌憚のないご指摘や質問などお受けしたいので、挙手してください。

参加者： マイク・ルイス氏の「産官学+コア」の話がすごく印象的だった。コアになる部分が福岡だと考えると、教育や人材、人と人の知識が交わることで新しく生まれてくるみたいなストーリーがあるという方向に向かっているのかと感じたが、そういう方向性が福岡にはあると理解して良いのか。

松田： 調査の過程でコア機関や組織をリストアップしたが、実際やってみると、お金、その人たちを結び付ける場がまだまだ十分ということが、今回、各地域とやり取りして見えて来たところだ。そこは計画して調査しきれていないので、きちんと見えていない。高等教育が大きな産業になっていくときにどんな可能性があるかという、九州大学のような研究機関や国際的人材をトレーニングする機関がもっと福岡に増えていくことは、そこからコア、産業として雇用を生む可能性がある。昨日、おととい、アジアの高齢者問題の研究者が集まる会議に参加したが、そこに参加していた国連の高齢研究センター所長は、「アジアのこれからの高齢化政策を考えると、人を育てる場所がと

でも足りない」と言われていた。そういう機能を福岡でもつ。ただし、来る方はアジアの方だから、言語は教えることになるので、九州大学が学士課程で英語で教える課程を増やしたように、そういうことをすることによって、そこに例えば学んだ学生が企業に就職し、また、企業の方がもう一度ビジネススクールに戻っていくという、まさに人の移動によって、移していくことを一歩進めていかなければいけないと感じている。それはこれからではないかと思っている。

参加者：二つ聞きたいことがある。一つはテクニカルな福岡都市圏のとらえ方。もう一つは今回の IRBC に集まった海外の関係者が福岡をどういう風にとらえられたのかということだ。福岡市をとらえると自動車産業は市外。福岡都市圏という自動車産業は非常に重要な産業をとらえられると思う。どう捉えるかで、分かれ目になる。また、福岡というのはどういう風に捉えられていたのか。他都市から来られた人はどう福岡を見られたか。今までいろんな形で福岡がイメージされていたが、非常に興味がある。今日の話の中でも IRBC の概要と、他都市の事例をご説明いただいて、福岡にこういうものができるというお話をいただいたが、先端的な都市を見られた方がそういう目で見て、福岡はどうだったのか。IRBC の中でもそういう話があったのかも知りたいと思う。

松田：都市圏の捉え方については、IRBC の実行委員会の中でも議論になっていて、まだ答えは出ていない。一つこの調査の中での私たちの最大の課題は、都市であっても、都市圏であっても、都市圏を捉えるためのデータがどこにもないということ。したがって、結果的にお示しするデータが市になってしまう。これはベンチマークする時に常に問題になっている。協議会にデータを出そうと思っても出せない状況にある。このデータを使って、様々な戦略を作っていくという仕組みと人材を確保しないと、広域戦略づくりも漏れが出てくる可能性がある。そこが課題だ。都市圏をどう設定するのか。すでに今福岡都市圏という行政のくくりがあるが、経済戦略を作っていく上で適切なのかどうかということも含めてこれからの課題だと認識している。福岡は IRBC メンバーからどのように捉えられていたかは、山下さんから説明していただく。

山下：その前に都市圏についてちょっと話を加えたい。福岡都市圏で成長戦略を作るべきだと私も思うが、かなり個人的な意見だが、福岡の成長戦略は、都市圏もだが、熊本と北九州も入れて縦の軸で作っていくべきじゃないかと思っている。と言うのも、九州新幹線ができて 30 分、1 時間。これは世界的にいえば都市圏だ。ずっと今日は福岡のいわゆる都市圏で話をしてきたが、そういったもっと広域で交通移動、人の移動をベースとした流動的な地域を、交通インフラが劇的に変わろうと行く中では、私たちはきちんと考えていくべきだし、松田さんが言われたようなデータを取っていくべきだと考えている。

福岡がどのように見られたかと言う話だが、やはり住みやすさは伝わった。素晴らしいホスピタリティ、食べ物、自然が近くにあるという評が得られた。ただし、ここでビジネスがしやすい、うちの企業を進出させたいという言葉は聞かれていないと思う。ぜひ、企業を連れてくるという感想は私の中には残っていない。住み良いからビジネスができる所に発展させていかなければいけないという意味では、まだまだ本当に良い所、気持ち良い所、でもその次は考えつかないという反応だったと思う。皆さん、それぞれ非常に柔軟性があって、多様性のある文化に対する理解をされている方々ばかりだったので、もしかしたら、福岡は良い所だけれども、気がついていても途上

のところだから、敢えていう必要がないだろうと思われたのかもしれない。反対の意見、福岡は余り良くないという意見が聞こえてこなかった。その辺はもうちょっと突っ込んで、もう一度来ていただくなりして、きちんとした反応を集めていきたい。

松田： 初めて福岡に来て、ほとんど事前の知識もなく、福岡であることが分かったと言う程度だったと今回は思う。それに加えて国際的な知名度が低いということを私どもは認識した。同じメンバーの中のバンクーバーは国際的に地名度が高い割には所得が低い。観光地としても住みやすさも人気のある非常に都市で、それで今まではやってきたが、オリンピック後はどうやっていくのかということ壁にぶち当たり、今、必死に経済戦略を立てている。例えば、オリンピック開催を前に世界の500社をリストアップし、「オリンピックに来てくださいと、その時にバンクーバー地域をビジネスする場として考えてください」とプロモーションして、実際100人ぐらい来て、数社の企業誘致に成功した。ブランドがあるところでもそれ位努力しているのだから、これから福岡が国際的にやっていくためには、その辺りのプランニングもしたほうがいい。

参加者： 先ほど、これからのラインとして九州新幹線、3号線の有り様を考えて、福岡、熊本という発想もあったが、福岡の都市づくりを、クラスターを福岡というだけでなく、福岡県は筑豊地区、北九州市とカップリングすることで、もっと違うものができるのではないかと思う。福岡は水がない、史跡がない。脆弱性がある。そのあたりのカバーをしながら、それぐらいの地域で考えていかないとこれからは駄目ではないか。私は福岡県で育って、今は佐賀にいる。都市圏と言うが、今はそうでなくて、篠栗線でサークルができる可能性がある、筑豊地区、飯塚を核心とした地域が大事なところ。福岡だけという時代ではないのではと思うのだが、どうだろうか。

松田： まさしく地域をどう捉えるのかということが、広域戦略を考えるときに重要となってくる。移動経路が短くなっているから、もっと広域で考えようという発想と、一方で広がってくればなるほど、実際にガバナンスを維持して行く難しさ、ハードルがどんどん上がる。そこのバランスをどうとるのか。とにかく早く実行することを大事にしないと、このIRBCで、福岡で、今回この会議をホストした事がぎりぎりなところで、これ以上国際化対応が遅れるとかなり危ないのではないか。それを、たくさんの人と広域がどうだと議論していたら時間がかかる。それはリスクだ。それはひょっとしたら、やってみないとわからない。本当にパートナーとなる他の地域の方々が、そっちに行こうよ、というようなケースが早くとれる様な、そういうリーダーシップの交流ができれば、それは別の話だと思う。今まで果たしてそれだけの対話が、どれだけ行われていたかと考えると、これは、ある意味でチャレンジングな課題であると思う。短期的にやることと、10年20年かけてやることと、いくつか時間軸を分けて取り組んでいって、まず実績を作ること、広域でありながらも早く実績を出して、産官学と一緒に自分たちの地域のビジョンを共有する取り組みを始めることが大切だと思っている。

山下： 私はやっぱり九州だと思っている。グローバルな世界でIRBCのように似ている同じようなサイズの地域ネットワークを作りながら連携し、ベンチマークしていくこと。東南アジア、アジア地域でのベンチマークし連携して行くこと。隣接する釜山や上海、狭い広域の国際的な地域の都市とも連携しながらベンチマークしていくこと。この3つが国際戦略に必要なだと思っているが、それと同時に地元でも福岡を中心とした福岡

都市圏、北部九州、さらに九州ならではの、まとまった九州なのだから、九州の各都市がきちんと連携し、お互いの戦略を作りながら、分担しながら同時に進めて行くことが必要だと思う。福岡だけでなく、福岡で私たちが学びつつあることも九州の各都市と一緒にやろうと声掛けしながら、広い九州内で連携を進めていったら良いと私は思う。

松田： 日本国内の調査研究でも、アメリカの研究でも、都市圏が延びることが、広域全体、経済力を牽引するというデータがたくさん出ている。どうしても都市圏に集中して、それ以外の地域、地方が軽んじられていて、衰退する懸念があるが、逆に都市圏なり、中心になるところが伸びないと、他も衰退していくということになるので、国際的戦略が得意なところが、頑張っって引っ張っていくという考えが重要だ。

山下： やはり、北海道にはではないと思う。札幌だけが栄えて、夕張が破たんする。こういう事例を見ると、九州は各都市がまだ分散して力を持っていると思う。新しい九州の道州制モデルを作っていけたら良い。そういうことにも今回の経験や学習を活かさせていけたら良いと思っている。

松田： 今回、都市として、地域としてどういう風に進むべきか、たくさんの事を学んだが、行動しないといけない。行動するとき、既存のような仕組みを取り込んでいかないといけないこともあると思う。今回の会議では、実行委員会の皆さんが、私どもや若いメンバーに色んなことを託してくれた。これから地域づくりの新しい担い手を発掘して、一緒に応援していかないといけないと思う。ぜひ、この話を若い方をはじめ、たくさんの方々に伝えていきたいと思う。ぜひご協力ください。

#### 4. 閉会挨拶